女性統治者ブラウンシュヴァイクのエリーザベトのルター主義受容についての一考察

伊勢田　奈　緒

1．はじめに

宗教改革者ブーゲンハーゲン（Johann Bugenhagen：1485-1558）について調べている中で、非常に気になったのがブラウンシュヴァイクにおける福音主義の浸透についてである。この地域は、彼が最初に宗教改革を本格的に行ったところであるが、当時の統治者はカトリック信仰のままであった。この地がどのようにルター派を受容していくのか興味があり調べていく内に、ルターの運動を支持し、自分の領地に福音主義を広めようと苦闘したブラウンシュヴァイクのエリーザベト（1510〜1588）の存在を知った。彼女の働きについてルターもメランヒトンも尊敬をもって絶賛している[1)]。彼女は摂政として、領内にルター主義を導入すると共に、宗教改革者たちと共に、上手く領地を治め、他方、後継者である息子に統治者としての訓育をしつつ、また福音主義に基づいて４人の子供たちを育てた。彼女は自分が選んだ自分の信仰を政治的利害関係のためではなく、純粋に自分の領土に広めることが自分の務めであり正しいことであると信じていた。尚、当時、彼女は女性統治者として宗教面はもちろん、政治面、行政面においても非常に大きな働きをしている。しかしながら、西欧では彼女の生涯について研究はされているがその数は少なく、ルター派の信仰へ回宗する過程の考察や彼女の宗教改革を通しての統治について研究はなく、また、日本においては、彼女の存在、さらにその働きについてほとんど知られていない。

1525年、当時14歳であったエリーザベトは40歳年上のブラウンシュヴァイク・カレンベルクのエーリッヒ公と結婚した。当初は二人ともカトリック教徒だったが途中からエリーザベトは自ら、カトリック信仰から福音主義信仰へと回宗した。本稿では宗教改革運動の中にあって、カトリック信仰者であったブラウンシュヴァイクのエリーザベトがどのような経緯を経てルターの教えを受け入れていったのかを考察する。尚、この考察は一統治者の信仰が領土内の信仰となるその前提となると考える。

先ず、彼女の背景とブラウンシュヴァイクという地域におけるブーゲンハーゲンによる改革について述べた後、彼女の回心への過程を検証する。

---

1) メランヒトンは「エリーザベトは穏やかで愛すべき母なる心をもって、信徒に福音を伝え、養い、広めていく教会を建てていった」と評している。(SonjaDomröse,FrauenderReformationszeit,Göttingen,2010,p101尚、エリーザベトについてドイツにおいても研究されておらず、Ingeborg Mengelによる研究、Elisabeth von Braunschweig-Luneburg und Albrecht in Preussen. Ein Furstenbriefwechsel der Reformationszeit, Gottinger Braussteine zur Geschichtsweissenschaft, Bd .13/14,Gottingen 1954 がある。

2．ブラウンシュヴァイクとエリーザベトの回心

①　エリーザベトの背景

ドイツにおいては中央集権と地方分権との対立が中世以降、続いていた。神聖ローマ帝国の皇帝カール５世は国会や法廷などを用いて中央集権を図ろうとしたのであるが、領邦は独立を保持しようとして皇帝に抵抗して、こぜりあいは絶えなかった。同様に領邦内では貴族や農民達が諸侯たちに対して抵抗していた。また、1517年、ルターが宗教改革への火蓋を切って以来、1520年代から30年代はルター派による活動が活発な時であった。それ故、ドイツでは、カトリックとプロテスタント両派の対立が起こり、問題が複雑で且つ、深刻化していった。さらに領邦を兄弟に分割するしきたりによって、領邦は細分化していった。当時、ザクセンはエルネスティン家領とアルベルティン家領に分割されていた。ヨアヒム１世は選帝侯の身分を長男のヨアヒム２世に譲り（1539年にルター派に改宗)、キュストリン地方は弟のヨハンに与えた。ブラウンシュヴァイクも同様に分割されていた。1491年、ヴィルヘルム１世の息子のヴィルヘルム２世は退位して２人の息子、ヴォルフェンビュッテル侯ハインリヒ１世（Heinrich II；1463-1514）とカレンベルク＝ゲッティンゲン侯エーリヒ１世（(Erich I ；1470-1540）に領土を譲った。1494年、兄弟は領土を分割し、兄のハインリヒ１世はヴォルフェンビュッテル侯となり、弟のエーリッヒ１世は西部のカレンベルク及びゲッティンゲンを手に入れその地を治めた。さらにエリーザベトが結婚した頃はヴォルフェンビュッテルはエーリヒの従兄弟ハインツ（Heinrivh der Jüngeree；1489-1568）が統治していた。

エリーザベトは1510年にケルンで生まれ、彼女の父はブランデンブルク選帝侯ヨアヒム１世（Joachim；1484-1535）で、マインツの大司教であったホーエンツォレル家のアルブレヒト枢機卿である兄と共にルターに反対した人物である。彼女の母であるブランデンブルク侯妃エリーザベトは、デンマーク王女であった。エリーザベトには、兄弟姉妹が５人いて、兄のヨアヒム（後にヨアヒム２世)、姉のメクレンブルク侯妃になったアンナ、妹のアンハルト公妃のマルガレータ、弟のヨハンがいた。

1525年、エリーザベトは14歳の時、先妻（ザクセンのカタリーナ）を亡くしていた55歳のブラウンシュヴァイク・カレンベルクのエーリヒ１世と結婚した。1526年に彼女が15歳の時、エリーザベトが生まれ、続いて1528年に長男エーリッヒ、1532年にアンナ・マリア、1534年にカタリーナが生まれ、四人の母親となったが、彼女の生涯は試練続きであった。中でも、1534年は彼女にとって人生の転換の年であったと思われる。まず、末娘のカタリーナは難産で生まれたこと、第２に夫の愛人騒動が起こったこと、そしてルターと出会ったことである。エリーザベトとエーリヒの夫婦仲は悪かったようではないが、年齢差がありすぎた。三番目の子であるアンナ・マリアが生まれた直後から、彼女は身体を壊し、他方、エーリッヒ公はかつての愛人であったアンナ・フォン・ルムショッテル（Anna von Rumschottels）の所へ頻繁に通うようになった。このことを知った彼女はショックで心身共に害してしまった。さらに、この愛人のことが公に発覚してしまい領内で大問題となり、1534年には魔女裁判が行われた。この時、アンナは火刑となるが、しかしアンナではない別の者が

焼き殺され、彼女自身は逃亡することによって領内を追放となっただけであった[2)]。一連のこの騒動を経て、エリーザベトは精神的に強くなったようであり、他方、夫エーリッヒは自分のしたことを深く後悔すると共に、妻に対して、ブラウンシュヴァイク・カレンベルク内のゲッティンゲンとハノーファーの地を統治する権利を与えた。エリーザベトはこの地を自由に支配することができるようになった。尚、ルターとエリーザベトとの出会いについては２．③で述べる。

②ブラウンシュヴァイクの宗教改革[3)]

次にブラウンシュヴァイクのブーゲンハーゲンによる改革を述べよう。マルティン・ルターは、臨時司教論をもって、1528年以降教会巡察を行った中で、明らかになってきた諸問題に対して領邦君主の権威のもとに教会令を発布し、改革を推し進めようとした。この改革の実践にあたったのが、ブーゲンハーゲンであった。ブラウンシュヴァイクでは、ヴィッテンベルク大学でルターとメランヒトンに学んだ聖エギディウス聖堂の若い修道士であったゴットシャルク・クルーゼ（Gottschalk Kruse；1499-1540）が1522年より、ルターの教説を説いて回っていた。彼は、一般の人々にわかりやすく語っていたので、ルターの教説は強い支持を得ていった。この動きに対して市参事会員たちは、ブラウンジュヴァイクでの騒乱と大変革が起こるのを恐れて，ルターの教えを積極的に学んだ。他方、ブラウンシュヴァイク・ヴォルフェンビュッテルの統治者である厳格なカトリック支持者のハインツ公はこの運動を阻止しようとした。しかし、彼らの運動の盛り上がりを狼公と異名をとるハイツでさえ、止めることが出来なかった。ついに、1528年に、ブラウンシュヴァイクの都市では宗教改革を行うことになった。この年は、エリーザベトがエーリヒを生んだ年でもあった。ブラウンシュヴァイクでは神学的指導をしてもらうために、ブーゲンハーゲンを招聘した。同年、ブラウンシュヴァイク市参事会の牧師であったH.ヴィンケル（Winkel Heinrich；1493-1551）により、ブーゲンハーゲンは、「市のすべての教会の共通の牧師、説教者」に任じられた。彼は同市で説教者、聖書解釈者、牧会者、教育者、法律問題の助言者、共同審理者、組織作成者として多方面の活動を行った。またこれ以降の彼の活動の核となった仕事は、教会規定の作成であった。

先ず、彼が教会規定を作成し、それを市参事会員、市参事会員に選ばれうる14のギルドの長たち、５市の行政区民の28人の代表等により確認され、1528年９月６日、全市の教会でこの規定を導入することになった。こうして、ブーゲンハーゲンの尽力もあり、ブラウンシュヴァイクは、宗教改革を市参事会と牧師の協力の下に組織的に、またそれを行政に組み込み、制度化しながら実践していった。しかし、実際の改革遂行には領邦君主の権威や支持が必要であったことは否めないの実情であった。

③　エリーザベトの回心

エリーザベトがプロテスタント信仰へ回心したのは、直接には、母と弟のキュストリンのヨハン

---

2)　SonjaDomröse,FrauenderReformationszeit,Göttingen,2010,pp.102-103

3)　拙著、民衆本『ティル・オイレンシュピーゲル』と宗教改革運動の接点について一考察、「キリスト教研究年報」第三号、静岡英和学院大学、2015年３月参照。

の訪問の際、ヨハンの依頼を受けて、ヘッセン地方伯フィリップの領地からルター派牧師アントニウス・コルヴィヌス（Anton Corvinus；1501-1553）を招いたことがきっかけであった。彼女は彼の説教を聞き、感銘を受け、一年もたたないうちに、ルター派に転向した。夫エーリヒはその際、妻の信仰には干渉はしなかったが、彼自身は福音主義を信奉はしなかった。彼は長年、カトリック信仰を保持し、また、皇帝に忠誠心をもっていたので、カトリックを擁護した。しかし、ルターのヴォルムスの国会でのルターの勇気に感動し、ルターに尊敬の念をもっていた。このコルヴィヌスはヘッセンのヴィッセンハウゼン出身で、1519年にLoccum修道院で修道士になったが、やがて、ルターの教説に触れ、1523年に修道院を出て、ヴィッテンベルク大学に行き、マルティン・ルターとメランヒトンに学んだ。後に彼は1528年、ゴスラー、1529年にヴィチェンハウゼンで説教者となった。1540年には、彼はブラウンシュヴァイクのカレンベルクの最初の教会規則を書き、ヘッセンのフィリップの監督となり、また、エリーザベトの説教者となり、1539年にはノルトハイムとヒルデスハイムの改革をブーゲンハーゲンと共に行った。1542年にはブラウンシュヴァイク・カレンベルクの主任監督となった人物である[4)]。

では、彼女がなぜ、福音主義を受容することを決意し、洗礼を受けるに至ったのであろうか。彼女の回心までの過程について既に述べた背景と併せて考察してみよう。彼女の回心には、第一に、母親の信仰に関する問題、第二に夫との問題、そしてルターの教えに対する反発が大きく関わっていると考える。

先ず、母親の問題についてである。最初、母親の信仰が彼女にとって大問題で、彼女には全く不可解であったと考えられる。前述のように、1535年、エリーザベトは弟のキュストリンのヨハンと共に、亡命中のルター派に改宗した母であるブランデンブルクのエリーザベトの訪問を受けた。既に述べたように、前年、彼女にとって大きな試練があった。彼女が心身共に非常に苦しんでいた時に、母や弟からルターの教えを聞いたと考えられる。また、この頃からルターとの書簡を通しての問答も始まった。その内容は個人の救いの問題から、やがて領内への宗教の改革まで広がっていった。しかし、当初、エリーザベトは母がルター派に改宗したことに大反対であった。さらに言えば、全く理解ができなかったのであろう。そして恐らく、父ヨアヒムの元を去り、そして家族を棄て、命を賭けてまで新しい信仰を持ち続けようとした母を許せなかったのであろう。しかし、それは別の見方をすれば、ルターの教えに関心を持つようになるきっかけとなったとも言えよう。エリーザベトの母であるブランデンブルク侯妃エリーザベトの背景を見ると、政略結婚と宗教の問題が実に複雑に考察していて、個人の宗教の問題が政治的な問題と絡んでいる。

エリーザベトの母は既に述べたようにデンマーク王女であり、デンマークにルター主義を導入したクリスチャン２世の姉妹で、彼女の母クリスティーネは、ルターの保護者でありザクセン選帝侯となったフリードリヒ賢公とヨハン堅忍公の姉妹であった。彼女の夫ヨアヒム１世はブランデンブルクの選帝侯で、兄であるマインツの大司教であったホーエンツォレル家のアルブレヒト枢機卿と

---

4) Ernst-AugustNebig,Elisabeth:HersoginvonCalenberg,Gottingen,2006,pp.52-55

共にルターに反対した人物であった。さらにヨアヒムは自ら筆をとってルター訳聖書の批判を刊行している。また母エリーザベトの兄弟のデンマーク王クリスチャン２世の后イザベラは、カール５世の実の姉妹でありながら忠実なルター派となっていた。ブラウンシュヴァイクのエリーザベトの兄弟姉妹たちは皆、カトリック信仰に基づいて教育を受けたが、母であるエリーザベトは、彼女の周りのルター派を信奉する人たちの影響や当時、巡回して福音を説いていた伝道者たちの影響もあって、ルターが神の言葉を真に正しく理解していると確信するようになり、1527年イースターの際－ヨアヒムがシェレジーエンに狩りに出かけ、留守中に－ルター派の牧師からパンと葡萄酒に与る聖餐式を受け、福音主義に改宗したのだった[5]。当時、忠実なカトリック信奉者である夫ヨアヒムはルター訳の聖書、讃美歌を禁じ、ルターの教えは異端として徹底して迫害していた。故に、ヨアヒムは妻エリーザベトの行為に、激怒したのであった。この時、父であるヨアヒムに母がルターの説いている新しい教えに基づいてパンとぶどう酒の聖餐式に与っていると密告したのは、娘のエリーザベトであった。彼はマインツのアルブレヒト枢機卿に相談し、ためらわず、半年の猶予を与えつつ、「新しい教えを棄て、古い教えに基づいてパンだけを受けるミサに出席せよ。」とエリーザベトに命じ[6]、翌年まで猶予期間を与え、幽閉した。しかし、翌年、３月に彼が娘であるブラウンシュヴァイクのエリーザベトとその夫エーリッヒ１世を訪ねていた間に、カトリック信仰に戻る気が全くない妻エリーザベトは、逃亡する道を選び、ザクセン選帝侯のところへ逃れた。この時、彼女は27歳で、５人の子の母であった。子供が生まれるまでは彼女は夫に愛されていた。しかし、５人の子供を生んだ後、夫は愛人のところへ行ってしまったのであった。孤独となった彼女は、魂をいやしてもらうために教会へ行ったのであるが、救われないままであった。彼女は魂の糧を求めて、巡回伝道者たちの話を聞きに行ったり、またルター訳の聖書を読んだりした。

一方、夫ヨアヒム１世は1535年に亡くなるまで、ルターと宗教改革の徹底的反対者であった。彼は後継者である息子ヨアヒム[7]にカトリック信仰の遵守を誓わせ、領内でのカトリック信仰が堅持できるものと信じて、息をひきとった。しかし、妻であるエリーザベトは、夫の姦通問題は赦せても、宗教上の事柄ではどんなことがあっても妥協することはできず、逃亡生活を送り続けた。1538年には、彼女はルター一家の居していた黒い修道院にも滞在した。当時、ルターの妻であるカタリーナ・フォン・ボラが心身共に疲れていたエリーザベトの世話を引き受けていた。この滞在中、ブラウンシュヴァイクのエリーザベトも、母に会うためにルター家を訪問し、６週間も滞在している。その間、恐らく、エリーザベトは、ルターの教えを直接に聞くことができたであろう。そしてじっくり自分の中でその教えの真偽を吟味したことが想像される。その後、母エリーザベトは息子ヨアヒムが用意した住居があるリヒテンベルクに移り住み、他方、1539年、長年、母を介して、ルターと通じていたヨアヒム２世は、父の遺言を裏切ることになるが、ルターの教えを受け容れた。そし

---

[5] SonjaDomröse,FrauenderReformationszeit,Göttingen,2010,p103

[6] Ursula Koch,Die gelebte Botschaft,Hamburg,2010,p.28

[7] John, Margrave of Brandenburg-Küstrin (1513-1571)は，1538年当時、福音主義に改宗していた。彼の領土はプロテスタント化し、シュマルカルデン同盟に所属していた。しかし、シュマルカルデン戦争ではカトリック側と闘った。

て、1545年には、母エリーザベトは、息子ヨアヒム２世のもとへ帰った。以上のような母との関わりの中でエリーザベトはルターの教えを理解し、受け容れていったと考えられよう。

次に夫との問題であるが、先ず、既に述べたように彼には結婚する前から愛人がいた。エリーザベトの母も前述したように、夫の愛人問題では悩み苦しみ、救いを求めていたが、彼女も同様であったと言えよう。14歳で結婚した幼い彼女は、初めは母の心痛を理解してはいなかったと思われる。彼女は40歳の年の差があったにもかかわらず、大したいざこざもなく結婚生活を送ったようであるが、そうは言っても、この親子以上の年の差ではお互いに理解し合うことは難しかったのではないかと思われる。不思議なことに、二人の結婚生活は彼女の夫エーリヒは、主としてエリックスブルクか、カレンベルクに、エリーザベトはミュンデンに住むという、居を異にするものであった。実はこの別居生活には明らかに理由があり、前述のようにエーリヒ公は初めの妻がいた頃から、地方貴族の娘であった愛人（Annna of Rumschottel）がおり、彼女との関係が続いていたからである。しかし、彼女の夫は激しい気性の彼女の父と比べ、非常に温厚で楽観的で寛容な人物だったようである。彼は、若い妻は愛人アンナの存在について気づいていていないと思っていたようである。彼の性格については、たとえば、ヴォルムス国会でルターの堂々とした弁明に感動して、自分の信仰について「わたしは余りに年をとりすぎていて、何が正しく、何が正しくないかを知ろうと骨折ることはできない。わたしは自分が洗礼を受けたときの信仰をもって仕えていて、従わねばならない信仰が皇帝が信じておられる信仰をもって死のうと思う」と語ったという[8]エピソードがあるくらい鷹揚な性格だったようである。

実際に、エーリヒの考えは甘かったようである。当時、18歳のエリーザベトは、アンナという存在に対して嫉妬すると共に、倫理的な観点からも、彼女を許すことができず、アンナを「魔女」と訴えた。しかし、なぜ、エリーザベトがアンナに対して魔女の訴えをしたのであろうか。その理由はまず、王宮の中で彼女にアンナのことを密告した者があったと考えられるよう。また、1528年、二番目の子であるエーリヒが生まれた後、彼女は産後の肥立ちが悪く、なかなか元のように健康がもどらなかった。彼女の病状は、彼女の侍医であるブルクハルド・ミトフ（Burkhard　Mithoff）は、「魔女」であるアンナに起因しているのではないかという診断を下した。彼女はさまざまな噂や侍医の診断もあって、アンナを「魔女」として訴えたと考えられる。ところで、宗教改革と魔女狩りは、相容れないように思われるが、意外にも実際、存在していたのである。むしろ、森島恒雄氏によれば「近代的なルネサンス運動と宗教改革運動とは、その開始から終滅にいたるまで、中世的な魔女裁判とその時期を同じくした[9]」と述べている。さらに衝撃的なのは「宗教改革の拠点のひとつは、ドイツは、もっとも熾烈な魔女裁判の本場であったし、そのドイツで魔女狩りが熾烈になったのは宗教改革からであり、新教徒の手によってである[10]」と指摘している。確かに、ルターは悪魔の現実性を強調していた。ルターの『教理問答』では、「キリスト」の名が63回出てくるの

---

[8] A. Kurs,Elisabeth,Herzogin von Braunschweig-Calenberg,Halte,1891,p.8
[9] 森島恒雄『魔女狩り』岩波書店、1970年、172頁
[10] 森島恒雄、同掲書、173頁

に対して「悪魔」の名は67回、記している。悪魔の存在はルターの身辺に常につきまとい、苦んだことは有名なことである。ヴァルトブルク城で深夜、悪魔がくるみの実を落とす音を聞いたり、部屋の片隅にいる悪魔をめがけてインク壺を投げつけたりした。ルターは魔女に対しても、恐怖と憎悪を感じていた。たとえば、「私はこのような魔女にはなんの同情ももたない。私は彼らをみな殺しにしたいと思う。・・・・創造主に対して反逆し、また、悪魔には認める権利を神に対しては認めようとしない魔女が、死刑に値しないということがどうしてあろうぞ[11]」とあるが、ルターは魔女に対して、魔女は魔法をもって病気を引き起こしたり、また、その他の害を引き起こしたりするとして、魔女は罰すべきだと考えていたようである[12]。ルターは結婚、不貞、愛人関係について、『卓上語録』の中では次のように述べている。まず、結婚については、「結婚は神の素晴らしい賜物であり、秩序である。これは二つの愛、つまり本性的（でよい愛）と（ふしだらな）悪い愛からなっている。しかも結婚の敵、妨害者である悪魔は悪い愛のみならず、夫婦の闇の本性的な（よい）愛をも消してしまう。先人はその子どもたちに結婚について最もよい教えを次のように垂れたのである。『娘よ、夫が帰路に家の屋根が見えたとき喜ぶように夫に対して振る舞いなさい。他方、夫は家から離れるのを嫌い、帰ってきたとき、妻が喜ぶように、夫は妻と暮らしなさい。』[13]」と述べている。一方、不貞については、「神の前で二つの姦通がある。第一はマタイによる福音書５章27節で、誰もこれからは逃れられない。第二はヨハネによる福音書8章3節以下にある。これは醜い。けれども、（悪徳なのに世の中では）名誉であるように見なされ、ある著名な人がルターに『姦通がこれほど大きな罪であるとは思わなかった』と述べている。これは神、聖霊、国家、家庭に対する罪である。なぜなら姦通した妻は夫の子でない相続者を産んで、夫を欺くからである。[14]」としている。愛人関係については、「悪評高い姦婦が情夫と一緒に家財道具を持って逃げてしまった。ルターは『彼らを法定に呼び出し、事情聴取をしてから別れさせるべきである。』と言っている。このような事件は専ら当局の所管である。というのは、愛人関係はこの世の問題だからである。このような問題には教会は関与しない。関わり合うのは良心の問題である[15]」と彼の見解を述べている。

以上のような悪魔について、魔女について、結婚観、姦通、愛人問題についてのルターの考えをエリーザベトが受け容れたかどうかはわからないが、夫の不実について苦しんでいたことは確かなことであろう。彼女はこのアンナのこと、そして魔女裁判についてずっと心の傷は癒えなかったようである。のちに彼女はプロイセンのアルブレヒト（娘アンナ・マリアの夫）への手紙の中で、アンナの魔女裁判に纏わる事について、「亡くなった夫は、私がこの国に来る前に愛人がいました。私は夫に頼んで彼女に1000グルデンを与えて暇を出すように要求しました。しかし、彼女は人々を買収し、私に毒を投与したり、さんざん足腰が立たないほど打ちのめされたりして、５年間くらい

---

11) 森島恒雄、同掲書、175頁
12) Ernst-AugustNebig, p・36
13) M．ルター『卓上語録』植田兼義（訳）、2003年、教文館、304頁
14) 同掲書、311頁
15) 同掲書、314頁

病気に苦しめられました。[16]」と記している。

前述したように、1534年、彼女の転換とも言えるその年に、彼女はルターを直接知るようになった。彼女は母に対して罪悪を深く感じていたようである。それは、彼女が父に母が新しい聖餐式でパンとぶどう酒に与ったことを密告したことによって、ケルンには帰れず、逃亡生活を送ることになったことに対してであった。彼女は母に対して裏切ってしまったことを心から謝罪したが、母は意外にも簡単に許してくれた。このこともエリーザベトのルター主義への関心が深まっていった一因かもしれない。彼女がリヒテンベルクにいる母を訪ねた時以来、彼女は母を通じて、母の信仰を、そして、ルターの教えを、知ろうとした。しかし、初めはルターの話を聞くに耐えられず、ルターに対して反目していた。それはルターが、彼女が今まで信じていた教皇や司教を激しく攻撃する話をすることからであった。さらに彼がマインツの大司教であった彼女の伯父アルブレヒトやゲオルゲ公に対して、彼女は「地獄におちるように神に祈る」という説教を人々にしているのを聞いて驚き、信じられなかった[17]。初めは新しい信仰の教えに反目していた彼女であるが、母が心から信仰する教えを理解しようと、彼女はルターと定期的に信仰の疑問について書簡を交換するようになった。そして彼女は徐々にその教えを理解するようになったのである。ルターはエリーザベトに個人的に彼の翻訳したドイツ語訳の聖書を献呈している。ついに、彼女は1538年４月７日に、福音的信仰を公にした。「神の言葉を私は愛し、領土について祈ります。神の言葉は神の喜びに従って聞こえます。そして神の言葉は私の誠実な避難所です。[18]」というエリーザベトのこの言葉は、彼女がいかにルターの教えを受容し、生きる支えとし、またその教えが心から良いものだと信じて、それを自分の領土にどうしても浸透させたいという思いが伝わってくるものである。

④　回心をした後のエリーザベト

回心をした28歳のエリーザベトは信仰をもって生き生きと自分の立てた目標を果たしていくようになる。まず、彼女は目標を立てた。始めから彼女は領地全体を福音主義に変える決心をしていた。そのために、マルティン・ルター訳の聖書に示されている神の言葉に従って宗教を浄化すること、夫が亡くなった後、彼女が未亡人として継承する権利があるミュンデンの町とその周辺の土地とゲッティンゲンの町を確保することであった。これは、自分の生活の安定のため、同時に、その地域を自分の名において支配し、ルター主義を導入するためであった。そして、最後に、ブラウンシュヴァイク・カレンベルクを息子のエーリッヒのために確保することが彼女のこれからの目標となり、彼女はプロテスタントの信仰をもった女性統治者として歩んでいくことになる。この目標のために、先ず、彼女はゲッティンゲンとハノーファーの都市については、財産難のエーリッヒに巨額な金を支払って信仰の自由を買い取り、ルター主義を表明させ、ノルトハイムも、同様に、ルター主義を表明させた。さらに、彼女は都市だけでなく、農村地帯をも改宗させようとした。

夫エーリッヒは生存中、エリーザベトがプロテスタントへ改宗した後、福音主義を広めるための

---

16)　Ernst-AugustNebig, p・41

17)　William Chapman,Notable Women of the Reformation,Memphis, 2012,p.21

18)　SonjaDomröse,FrauenderReformationszeit,Göttingen,2010,pp.101

様々な行動をとるたびに、いつもそれに歩み寄ったが、カトリック信奉者で皇帝カール５世を支持している、ブラウンシュヴァイクのもう一つの領邦、ブラウンシュヴァイク・ヴォルフェンビュッテルのハインリッヒ公はエリーザベトが改革に熱しに取り組めば取り組むほど、彼女に敵を募らせていった。エーリッヒは1540年に亡くなったが、彼の遺言には自分が死んだとき、息子が青年に達していない時には、摂政を置くとし、エリーザベトを摂政に指名することが記されていた。そして、後見人としてハインリッヒとヘッセン地方伯のフィリップ方伯、エリーザベトの兄弟ブランデンブルクのヨアヒム２世を指名していた。1540年エーリッヒが亡くなった時、息子エーリヒは12歳であったので、結局、エリーザベトが摂政職につくことになった。これ以後、息子が成人するまで彼女は摂政職を精力的にこなしていくことになった。しかし、彼女にとって重要なことは神の言葉を広めることであった。

３．総括

以上、ブラウンシュヴァイクのエリーザベトが福音主義に改宗するまでを考察してきた。彼女の回心には母親の影響が圧倒的に強かったように思われる。エリーザベトは、始めは母がルター派に回心したことに反対であった。しかし、それは別の見方をすれば、ルターの教えに関心を持つきっかけであったとも言える。彼女は14歳の時、結婚しているが、その二年後、母がルター派へ回宗している。父が強いカトリック信奉者であることを考えると、当時の彼女は両親の信仰を通しての抗争の板挟みになっていたと考えられる。また、母が信奉するルターの教えには父の影響もあって脅威を感じていたと考えられる。つまり、福音主義は、父が異端として弾圧していた信仰であり、母を狂わせた信仰だからである。また、さらに彼女は母のことを父に密告してしまったという罪責感も重く心にのしかかっていたことであろう。年の差があったにもかかわらず、大したいざこざもなく結婚生活も、夫と愛人の関係は彼女のもう一つの大きな悩みの種であったと考えられる。さらに夫の愛人を魔女として魔女裁判を行ったという責めも彼女の中にあったであろう。こうした彼女の心の渇きを救ってくれたのが、母が選んだ信仰だったのである。

母エリーザベトの場合のように、宗教改革当時、統治者は個人の宗教の自由は難しく、統治者が自身の信仰を領地の信仰とするしかなかった。さらに難しいのは、ドイツは領邦国家から成り、皇帝カール５世の下の神聖ローマ帝国は中央集権を目指し、独立を保とうとしている紛争が絶えず、まして、皇帝はカトリック信仰の信奉者で、自らキリストの擁護者と自称している故に、混乱を帰することになる。Ｐ．ブリックレによれば、「国家と宗教改革」というテーマで提起された諸問題を要約すると「政治的利用」という言葉となることを述べている。そして、諸侯はルターの宗教改革を、自分に最も都合の良いように、自分の目的や意図のために利用した、という主張には、反論の余地がほとんどないであろう、とする[19]が、ブラウンシュヴァイクのエリーザベトはこの主張には例外的存在だと考えられる。彼女は、福音主義の信仰は真の宗教であると信じ、故にそれを自分

---

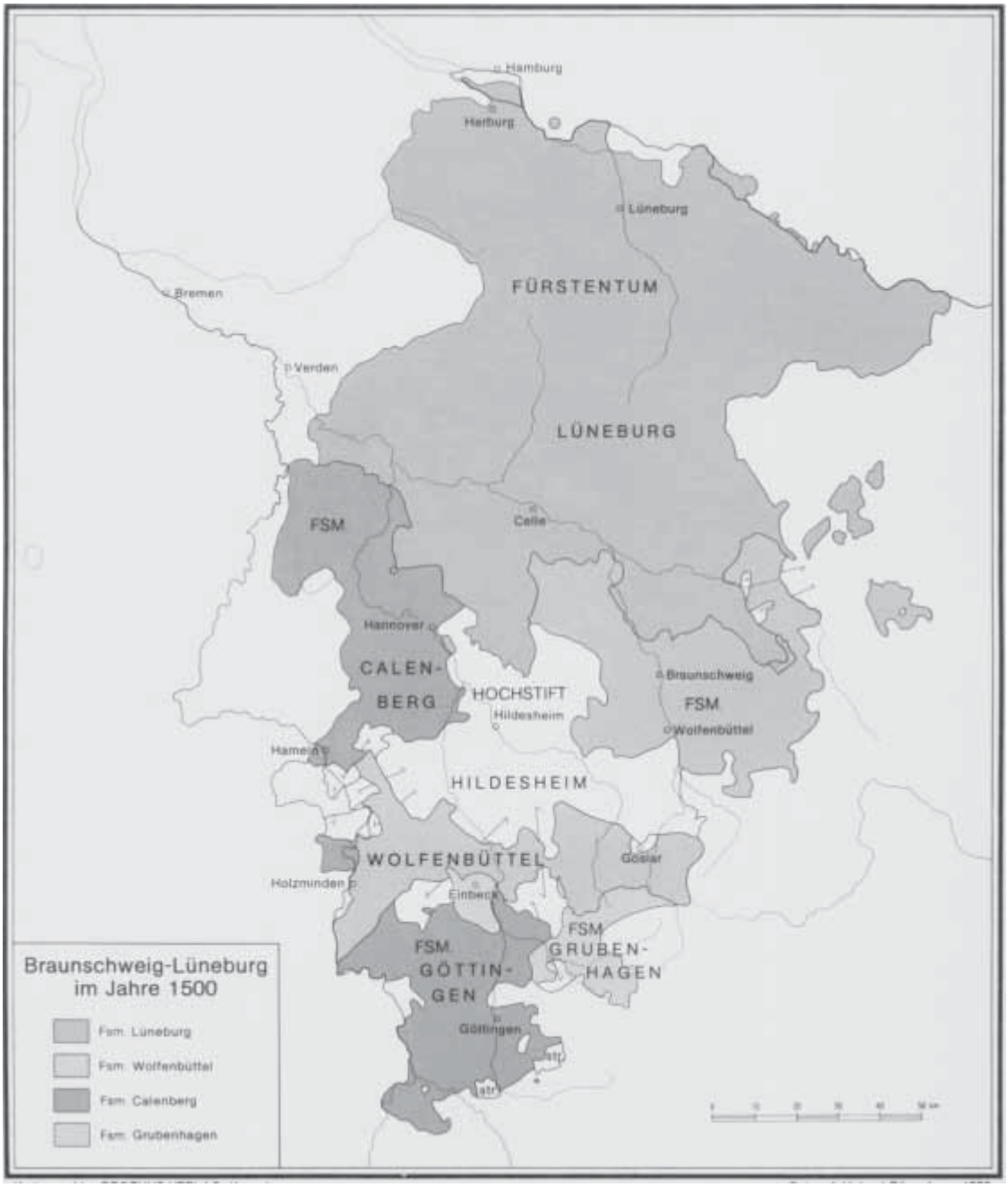
[19] Ｐ．ブリックレ著田中真造、増本浩子訳『ドイツの宗教改革』教文館1991年、296頁

の領内に流布させようとしたと言えると考える。

以上、宗教改革運動の中で、誕生したルター主義を積極的に取り入れて、統治したブラウンシュヴァイクのエリーザベトの回心について考察してきたが、これから彼女がどういう思いをもって領内の宗教改革を実施していったのかを継続して研究したいと考えている。

ブラウンシュヴァイクは領邦君主による領邦教会のあり方が紆余曲折したが、最後にはハインリッヒは彼の領土内でルター主義を許し、ブラウンシュヴァイク全体がアウグスブルク信仰告白を受け入れるようになった。これは、支配者が強制したからではなく、コルヴィヌスやブーゲンハーゲンなどの福音主義の牧師達の熱心な指導や、圧倒的に宗教改革に協力し続けたブラウンシュヴァイクのエリーザベトらの努力と尽力によって培われた土壌があったことも付け加えておきたい。

《一次資料》
Ingeborg Mengel,Aktenkundliche Untersuchungen an der Korrespondenz zwischen Elisabeth von Braunschweig-Lüneburg und Albrecht in Preussen,in：Archivalische Zeitschrift,48.Bd.,1953
M．ルター『卓上語録』植田兼義（訳）、2003年、教文館
《参考文献》
Andrea Lilienthal, Die Furstin und die Match, 2007, Hannover
Dieter Diestelmann, Braunschweig,Regensburg,2014
William Chapman, Notable Women of the Reformation,Memphis, 2012
Ernst-AugustNebig, Elisabeth：HersoginvonCalenberg,Gottingen,2006
Elenore Dehnerdt, Die Reformatorin,Stuttgart,1999
Martin Brecht,Martin Luther： Shaping and Defining the Reformation 1521-1532,Stuttgart,1985
Sonja Domröse,Frauender Reformationszeit,Göttingen,2010
Praxisnah：Arbeitsxhifte aus dem Frauenwerk,Heft7,Gotes Wort thet'Zum500.Geburtstag der Herzogin Elisabeth,2009
Ｐ．ブリックレ（著）田中真造、増本浩子（訳）『ドイツの宗教改革』、教文館、1991年
森嶋恒雄『魔女狩り』、岩波書店、1970年
牟田和男『魔女裁判』、吉川弘文館、2000年
「キリスト教研究年報」第三号、静岡英和学院大学、2015年３月
F?rstent?mer im Herzogtum Braunschweig-L?neburg um 1500



Landkarte entnommen aus：Geschichtlicher Handatlas von Niedersachsen Neumünster 1989,
Hrsg. Institut für Hist. Landesforschung, Bearbeitet von Gudrun Pischke Entwurf der Karte von Helmut Rüggeberg